

本研修参加の目的は、研究と臨床に対する考え方に関して日本と米国の違いを知ることであった。これまでに参加された方々から Stanford 大学の研究環境は、日本よりも充実しているとの報告があり、先進的な研究に関する講義を受講できることを期待していた。また、医療全般に関して臨床だけでなく、保険制度の観点からも日本との違いを知りたいと考えていた。本研修に参加してこれらの目的を達成したと同時に、日本と米国の相違点を把握することで、国際化を意識する上で重要な事項を認識することが出来たので併せて報告する。

本研修で最も興味深かった内容は分子イメージングであった。特に、manganese-enhanced MRI による痛みの画像化は、MRI 検査に新たな知見をもたらし、診断・治療のみならず痛みの予防に役立つと考えられた。また、講師の Biswal 先生は、米国における pain cost が巨額であることに触れられており、この技術を応用し痛みを予防することは、経済的な観点からも有益なものであると理解した。このような先進的な前臨床研究の成功は、研究環境が整っていることが大きな要因であると感じた。広大なキャンパス内には研究分野別に研究施設があるが、それらは全て寄付金によって維持管理されている。米国は日本よりも研究資金が集まりやすい環境にあり、また、来年以降も研究資金を得るために、昨年以上の成果を出す必要があるというサイクルが確立されていた。

診療放射線技師の臨床業務に関して米国は、モダリティ毎にライセンスが必要であり、その結果、臨床現場での新人教育および検査業務に日本とは違う特色があった。米国は養成機関で技術を習得するため、日本のような現場での新人教育はないということであった。また、現地の放射線技師とのディスカッションで、災害等で多くの救急患者が搬送され、勤務形態が不規則になった場合、ライセンス制度による検査業務の制限は、全ての検査業務が出来る日本の放射線技師と比較して、リスクになるのではないかということも話し合うことができた。

本研修の重要なテーマの一つに診療放射線技師の国際的視野がある。本研修を通じて感じたことは、出し手と受け手の役割を担う必要性があるということである。出し手は、研鑽を積むことで得た知見を外部へ発信することであり、受け手は、外部から最先端の技術や知識を得ることで理解を深めることである。そのためには国際学会や留学を通じて我々の strong point が何かを把握し、逆に何を学ばなければいけないかを知る必要がある。そして、得た知見は適宜フィードバックすることが重要である。本研修で得た経験を報告することや世界のリーダーを目指して国際学会に参加することは、日本の国際化を推し進めるために必要なことである。

最後になりましたが、本研修に際しましてご尽力を頂きました Stanford 大学、GEHC-J、日本放射線技術学会の皆様、引率して頂きました北里大学の佐藤氏、そして紙面の都合上紹介出来なかった最高の第8期生メンバーに深く感謝するとともに、本研修参加にあたり、快くご協力頂きました島根大学病院放射線部の皆様にお礼申し上げます。



修了証と Crazy guy の称号を授与

(筆者と Moseley 先生)